セピア5 スタート・ライン

山本哲也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
セピア５　スタート・ライン

【Ｎコード】
Ｎ９７１６Ｅ

【作者名】
山本哲也

【あらすじ】
ストーリー：いよいよ始まった体育祭。様々なトラブルの中、典子の、真吾の、さつきの、そして美雪の想いをのせ、亮太はスタート・ラインに立つ…。そしてそれは亮太にとっての新しい一歩を踏み出すきっかけとなるのか？セピアシリーズ第５話。

「これはこう？　典ちゃん」
サンドイッチ用のパンに包丁を当てながら、美雪が尋ねる。
「えーっとね、それは…」
傍らでパンにバターを塗っていた典子が顔を上げ、指示を出す。
体育祭当日の朝、典子の家の台所はさながら戦場のようになっていた。
まだ薄明かりのうちから起き出した典子と美雪が、今日のためのお弁当を作っていたのだ。
亮太と真吾、それに典子と美雪の四人分と大人数用であり、そしておそらくいつも以上にお腹を空かせるであろう亮太と真吾のためにかなりの量を作っているせいなのか、台所の混乱ぶりは常にないほどだ。
そして…。
「…あ」
具材を挟み込んだサンドイッチを切ろうとしている途中で、美雪が悲鳴とも溜め息ともつかぬ声を上げる。
力を入れすぎたせいか、途中で滑って崩れてしまったのだ。
「ああ、大丈夫よ、ちょっと貸して…」
そう言いながら美雪から包丁を受け取り、典子が形を直しながら手早く切っていく。
「ね？　こうやって、軽く押さえながらすっと包丁を手前に引くと上手くいくでしょう？」
典子はそう言うと美雪に包丁を渡し、交代する。美雪は恐る恐る、ゆっくりと包丁を入れていき…。
今度はどうにか決定的な崩壊に至らないうちに包丁が下まで届いた。多少いびつながらも、どうにかサンドイッチの完成だ。
「ね？」

「出来た…」
自分でもまだ信じられないのか、ちょっと驚いたような表情で手元を見つめている美雪に典子が微笑みかけた。
「じゃ、続きいこっか」
典子に促され、美雪は慣れない手つきながらも次のサンドイッチに包丁を入れ、典子はその様子を見ながらやりかけだった卵のかき混ぜに戻る。
この混乱のもう一つの原因は、美雪にあった。全く出来ないというわけではないのだが、やはり典子とは比べるべくもない。
（…ふう…）
てきぱきと料理を作っている典子を見て、美雪は心の中で溜め息をつく。
「どうかした？」
不意にそう声をかけられ、美雪はあわてて誤魔化す。
「ううん、何でも」
そう言うと、美雪は腕まくりして再びサンドイッチに取り組んだ。
暫く経つとどうにか予定していたメニューがすべて完成し、食べ物を満載したバスケットが三つも出来上がった。
「出来たね…」
放心したようにイスに座り込んだ美雪が呟く。
「うん…」
同じように座り込んだ典子が頷いた。
「あらあら、すごい有様ねぇ」
そこへ、今起き出してきたばかりの典子のおばさんがひょいっと顔を出し、呆れたような声を上げた。
確かに、改めて辺りを見回してみるとすごい状況だ。あちこちに卵やマヨネーズが飛び散っているし、そこいら中にご飯粒やパン屑、ハムの切れっ端などが散らばっている。
不意に、典子がクスリと笑った。

「美雪、ほっぺにマヨネーズがついてるわよ」
言われて美雪はゴシゴシと頬をこする。それから、自分の格好を改めて見回してみて、また溜め息が出そうな気分になった。
二人とも、制服の上にエプロンをつけて料理に臨んだのだが、美雪のエプロンにはあちこちマヨネーズやらなにやらが飛び散っていたのだ。対する典子の方には、これと言った汚れはない。
「しょうがないわよ、美雪はまだ慣れてないんだもの。すぐ出来るようになるわよ」
そんな美雪の思いを察してか、典子が慰めるように言った。

それから、朝食を済ませた二人は外へ出た。見上げると、澄み切った青空が目にまぶしい。朝のすがすがしい空気が心地よく、美雪は大きく伸びをしたいような気分だった。何だか口元が自然にゆるんでしまう。
気がつくと、典子が目をキラキラさせながらこちらを見つめている。
典子が悪戯っぽく微笑むと、美雪もそれにつられて微笑んだ。
二人は亮太と真吾にはお昼までお弁当のことは内緒にしておこうと約束していたのだ。
美雪は、亮太がどんな顔をするか今から楽しみだった。
ただし、そうすると自分が料理が下手だということを知られてしまうのではあるが…。
（大丈夫、味付けは典ちゃんがやってくれたから…）
そう自分を励ますが、それ自体がまた美雪を落ち込ませてしまう。
今度からは少し家で料理の練習をしてみようと思う、美雪だった。

「えー、本日は晴天に恵まれ…」
演壇に立った先生の声が辺りに響く。
校長先生のおきまりの挨拶から、体育祭は始まっていた。
藤ヶ谷高校の体育祭は全学年を大きく紅組と白組に分け、各競技

ごとの得点を加算していって最終的にどちらが勝ちかを決めるという方式で行われている。紅、白の区分けは単純にクラスで分けられていて、A組B組C組D組が紅組、E組F組G組H組が白組だ。
当然、亮太達二年C組は紅組で、さつきの三年D組も同じ紅組。そして同じ漫研の後輩の高梨久美子の一年E組と、康太郎のG組が白組だった。
宣誓、準備体操など、一連のお決まりの行事を終え、自分たちの場所に戻る。すぐ次の種目に出るのだろう、何人かはすぐに入場門の方に向かっていた。
「プログラム六番…」
マイクでアナウンスが入る。
席に戻ると、亮太は自分の椅子にどっかりと腰を下ろし、ぼーっとそれらがせわしなく進行していく様を眺めていた。この椅子は教室の自分の椅子を校庭まで運んだものだ。そのため、と言うわけでもないだろうが、座っていると何となく眠気がおそってくるような気がするのだ。
「ふぁ…」
亮太は今日何度目かの欠伸をした。
ぽかぽかと心地よい暖かみを投げかけてくる日の光が、眠気をよりいっそう助長する。さらに、何となく早い時間に目が覚めてしまったためいつもよりは睡眠不足気味なのだ。
「ふぁ…」
たまらず、亮太はまた欠伸をした。
「武内君、今日は頑張ろうね」
急に美雪が声をかけてきて、亮太は途中で欠伸をかみ殺す。
「あ、う、うん」
亮太は美雪の方をちらっと見て、それから少し顔を逸らした。体育着から覗く白いすらっとした足が、まぶしかったのだ。
そんな亮太の様子を察したのか、美雪は上着の裾を引っ張って足を隠すようにしている。

「あ、あれ、典子は？」
気まずい雰囲気を破ろうと、亮太が話題を見つける。
「あたし達、次の種目に出ることになってるから、典ちゃんは先に」
「そっか、が、頑張って」
亮太はぎこちない笑みを浮かべた。
「う、うん。武内君も、ね」
美雪はそう言って軽やかに集合場所へ向かって走っていく。しなやかに動く細い四肢と、それに併せて右に、左に、踊るように揺れる長い艶やかな髪。何だかいつもより明るく、輝いているようにさえ亮太には思えた。
「亮太ぁ、なーに赤くなってんだ？」
真吾が後ろからからみついてくる。
「な、何だよ」
亮太は真吾を払いのける。
「いやはや悲しいねぇ、正面からだとまともに見られないくせに、後ろ姿をじーっと目で追い続けるなんて」
真吾が馬鹿にしたように肩をすくめ、首を振る。
「何い！？」
パーン
「お、始まった」
亮太が真吾に掴みかかろうとした時、ピストルが鳴り、競技が始まった。じっと見つめている真吾の様子に、美雪が出ているのかと亮太は振り返ってしまう。しかし、美雪の番はまだ先のようだった。
「何だよ、まだじゃないか」
拗ねたように呟く亮太に、
「誰も綾瀬の番だとは言ってないぜ？」
とニヤニヤ笑いながら真吾が答え、肘で亮太をつつく。亮太はそれをうるさそうに払いのけた。
「けっ」

パーン
そうしている間にも再びピストルが鳴り、何人かの女の子達が亮太達の前を走り抜けていく。
「お、今の真ん中の子、可愛かった」
「馬鹿言え、一番手前だろ」
何のかんのと言いながらも、二人ともしっかりとそんなところだけは見ているようだ。
やがて、典子の番がやってきた。
パーンという音と共に、典子達が走り抜けていく。
典子は余裕で一着だ。
「知ってるか？　典子の奴、結構他の男どもに人気があるらしいぞ」
ニヤニヤ笑いながら秘密めかして真吾が亮太の耳元で囁く。
「…ま、可愛いからな」
亮太がゴールの辺りにいる典子を見ながら何気なく答えた。いつもと違う亮太の反応に、真吾はちょっと驚いた様子で亮太の方を振り返る。だがそんな真吾の様子には気が付かなかったのか、亮太は何気ない様子で付け加えた。
「あの凶暴さを知らなきゃ、惚れちゃうこともあるかもよ」
「…かもねぇ」
それを聞いた真吾はフッと微笑んで、大げさに肩をすくめて見せた。

そして、とうとう美雪の番がやってきた。
「お、いよいよだぞ亮太、しっかり目に焼き付けとかないとな」
ニヤニヤ笑いを浮かべた真吾がそう言いながら亮太を肘でつつく。
「うるさいな」
そう言いつつも、亮太の目は美雪に釘付けになっていた。
美雪がスタート位置についた。
パーン

ピストルが鳴る。亮太達の前を、美雪が走り抜けた。ほんの一瞬のことだ。だが、しっかりとその姿は亮太の脳裏に焼き付いている。美雪も他を大きく引き離して一着だった。

「は～」

亮太は今まで止めていた息を一気に吐く。別にそうするつもりはなかったのだが、自然とそうなってしまっていたのだ。

「なーに溜め息なんかついてんだよ」

再び真吾が肘でつついた。

「うるさいな」

言い合っている二人の後ろを、他のクラスの男子生徒達が歩いていく。

「やっぱ、いいよな、綾瀬さんはさ」

「だよな～。でもあの人、もう相手がいるって話だぜ」

「は～。やっぱおれたちにゃ縁のない人なのかねぇ」

何とはなしに、二人はしばしその男子生徒達の話に耳を傾けた。

「だってさ」

ややあって、ニヤニヤ笑いながら意味ありげに真吾が言う。

「な、何だよ」

亮太はそう答えながら俯いた。相手がいるという言葉が、ひどく気になってしまう。その相手とは、やはり柳井のことだろうか…。

「その後、どうなのさ」

目はグラウンドを見つめたまま、真吾が尋ねる。

「…な、何にもないよ…」

消え入るように亮太が答える。

「そんなの見てりゃわかるって」

真吾が呆れたように言った。

「じゃあ聞くなよ！」

耳まで真っ赤にして、亮太は真吾に掴みかかる。しかし真吾は涼しい顔で、

「ぼやぼやしてっと、取られちまうかもよ」

そう言いながら顎でグラウンドを示す。その先では、競技を終えた美雪が柳井と何か楽しそうに話をしていた。
「…かないっこないよ」
しばらく無言でその様子を眺めていた亮太は、やがて拗ねたように呟く。胸が締め付けられるように痛かった。
「…だったら諦めるか？」
目はどこか遠くを見つめたまま、真吾がいつになく真面目な調子で尋ねた。その表情をよく観察していれば、いつもはへらへらしている真吾の表情にちらりと悲しみがよぎった事に気が付いたかもしれない。
「…」
亮太は俯いたまま何も答えられなかった。
「『出来ない』って言葉はな、やるだけやってから言う言葉だぜ？」
そう言ってから、真吾は呟くようにぽつりと付け加えた。
「…一緒にいればチャンスはいくらだってあるんだからな」
はっとして亮太は顔を上げる。
横顔を見せたままの真吾は、どこか遠くを、今目の前に映っているのではない、別の景色を見つめているようだった。
「真吾…」
「やらないで後悔するより、やって後悔する方がいいっていうだろ？　お望みとあらばあっちの方はレクチャーしてやっからさ」
何か言いかけた亮太を制して、不意にこちらを向いた真吾がニヤニヤ笑いながら言う。
「…何の話だよ」
ジト目になった亮太が呆れたような声を出す。
「さぁねぇ？」
「何の話？　『やる』『やらない』って」
不意に典子の声が割り込んできて、二人は飛び上がらんばかりに驚いた。

いつの間に帰ってきていたのか、二人の側で典子がきょとんとした顔をして尋ねてきたのだ。
「い、いや、何でも」
二人そろってそう答えると、典子は疑わしそうな顔をして
「何よ～、二人とも、この前から…何かあたしの悪口言ってるんじゃないでしょうね？」
「ち、違うって。ゲ、ゲームの話だよ。俺の持ってるゲームでもう終わった奴をやろうか、って」
どうにかこうにか亮太が誤魔化す。
「ふーん？　ゲームねぇ」
なおも疑わしそうに二人をジロジロ見つめる典子だったが、それ以上は追求しても無駄だと思ったのか、何も言わずに自分の席に戻る。
（ほ…）
「あ、そうそう」
「は、はい！？」
内心ホッとしていたところに声をかけられ、二人はまた飛び上がらんばかりに驚いた。
「どうだった？　あたしの走り」
「…あ、ああ、すごかったよ」
真吾がそう言うとすかさず亮太も調子を合わせる。
「そうそう、さすがだって言ってたんだ」
「そ、そう…？」
照れたのか、典子が頬をピンク色に染めながら恥ずかしそうに微笑む。
「やっぱ凶暴なだけじゃないって」
そう亮太が言った一瞬後に
バチーン
という派手な音が響き渡った。
「…キジも鳴かずば撃たれまいに」

椅子ごとひっくり返った亮太を見つめて真吾がぼそりと呟いた。
それから暫く経って、そろそろ午前中の競技が終了するかという頃になった。
「…太君？　亮太君？」
ウトウトしていた亮太はさつきに揺り起こされた。
「ふぁ…あ、さ、さつきさん！？」
慌てて垂れかかっていたヨダレを拭い、引きつった笑みを浮かべる。真吾は相変わらずフラフラとどこかへ行ってしまっているらしく、また、典子と美雪はテニス部が体育祭の運営を手伝っている関係でそちらの方へ行ってしまっていた。
「どう、リレーの自信の程は？」
「は、はは…」
亮太の引きつった笑いがよりいっそう広がった。
「その様子だと、乞うご期待っていうわけではなさそうね」
「ま、まあ参加することに意義があるって事で」
そう言いながら、亮太は自分が情けなくなってきていた。
「どこかのオリンピック団みたいな事言わないで。やるだけやればきっと大丈夫よ」
「はは…」
どう言われても、亮太にはやれるような気がしてこない。
「亮太君、自分を信じて…」
「プログラム十二番の借り物競走に出場する生徒は、入場門まで…」
と、そこにアナウンスが入り、さつきは話を途中で止めて振り返る。
「いっけない、そろそろ行かなきゃ」
「あれ？　借り物競走って去年は最後の方だったような気が…」
怪訝そうな顔をする亮太に、さつきが答えた。
「うん、去年まではそうだったんだけどね、今年は、３年生が午

前中で帰れるようにって、午前の方に持ってきたの。みんな、体育祭より受験勉強の方が大事だからって…」
努めて明るくそう答えるさつきだが、その横顔は何だか寂しそうだ。亮太はこの前、マンションの近くで具合が悪くなってしゃがみ込んでいたさつきの姿を思い出し、納得のいかないものを感じた。
「そんな！　たかが半日ぐらいなんでも…」
「いいのよ、亮太君。みんなの言っている事ももっともだと思うの。それに…」
そこで少し言葉を切ったさつきは亮太に意味ありげに微笑んでみせる。
「亮太君たちは特訓までしてくれたしね。期待してるわよ、亮太君」
さつきは亮太の肩をぽんと叩いてそう言うと、足早に集合場所へ向かっていった。
「…はは…」
亮太は引きつった笑顔を浮かべてその後ろ姿を見送る。何だか崖っぷちに立たされているような気分だった。

「プログラム十二番、借り物競走…」
少し鼻にかかったアナウンスが流れ、借り物競走が始まる。借り物競走は各クラスから男子二人女子二人、計四人ずつ選手を出す事になっている。それが各学年毎、さらに男女別に分かれ、第一走者第二走者に分かれて競技を行うので、一回に出場するのは八人ずつ、つまり、最初は一年生のＡ組からＨ組までの男子第一走者八人で、最後はＡ組からＨ組までの三年生の女子第二走者八人、という事になる。
さつきはその最後の組だった。
いかなる理由で午前中に回されたとしても、やはりこの競技は『藤ヶ谷高校体育祭の名物』とまで言われているだけのことはあり、始まるとすぐに盛り上がった。もっとも、競技が白熱しているせい

ではなく、訳の分からない『借り物』の指示に出場者が困惑する様子が面白かったからだ。
パーンというピストルの合図で走り出した選手は、五十メートル先に置かれた紙を拾い、そこに書いてある指示通りの物を持ってゴールしなければならない。だがこの指示という奴が曲者で、眼鏡や時計など比較的普通の物であることはあまりなく、時には日頃からカツラだと噂されている『〇〇先生のカツラ』を借りてこいという物などが混じっていたりする。これこそが生徒会の役員やいろいろな委員会の連中が日頃の憂さ晴らしのために作り出したくじなのだが、そういったイロモノ系の指示を見て途方に暮れる様が面白いのだ。また、放送部の一団が控えていて、まごついている様子の者や特に変わった物を借りている者にはインタビューをして借り物が何なのかアナウンスを入れるというのも場を盛り上げるのに一役買っていた。
ふと気がつくと、一年生の女子の部で久美子が出ている。ピストルの合図で走り出した久美子は周りより遅れて借り物を指示する紙の所まで走り、最後に残っていた紙を手にした。と思うと亮太の方を見て暫く困ったような表情をした後、まっすぐ走って来るのだ。
亮太は思わずのけぞり、とっさにどこかへ隠れようとする。
だがそんな亮太の様子に気づかない程困っているのか、亮太がもたついている間に亮太の所にやってきた久美子は
「あ、先輩、あの…このクラスの学級委員で坂本さんていう人、知ってますか？」
そう、すがるような表情で亮太に尋ねる。
「…え？」
どうして久美子が坂本女史に用があるのかと、きょとんとした表情の亮太は間の抜けた声を上げて坂本女史の方を見た。
坂本女史は何か考えているかのように腕を組み、眼鏡の奥の目を細くして手元のクリップボードを見つめている。
「あの人だけど…」

亮太が指さすと、
「先輩、久美子のお願いです！　これ…」
そう言うと久美子は手に持っていた例の借り物の指示が書かれた紙を差し出す。
そこには、
『二年C組の学級委員、坂本綾子の眼鏡』
と、どこかで見たような字で書かれていた。
「…」
「先輩！」
黙って紙を見つめていた亮太はすがるような久美子の視線に後押しされ、渋々立ち上がる。
ライオンの口の中に頭を突っ込めと言われているような気分だった。
「…あの…坂本さん…」
久美子を後ろに従えた亮太は恐る恐るそう言うと、黙って紙を見せ、
「この娘に…」
と言い添える。
はじめ怪訝そうな表情で亮太から紙を受け取った坂本女史はやがて黙って眼鏡を外し、赤いケースにしまうと久美子に渡す。
初めて見る眼鏡を外した坂本女史は意外に美人だった。
「ありがとうございます　」
そう言って久美子は大事そうに眼鏡ケースを抱えてトラックの方に戻っていく。暫くするとトラックの方からアナウンスの声が聞こえてくる。
「さぁ、最後のあなた、何だか困っていたようですが借り物は何ですか？」
「あ…えっと、これです」
「『二年C組の学級委員、坂本綾子の眼鏡』…こ、これはちょっとマニアックですね…」

インタビュアーは対応に困ってしまったようだったが、二年C組男子の辺りからは溜め息とも何ともつかないような声が上がっていた。
まるでそれが合図だったかのようにおもむろに立ち上がった女史はまだその場に立っていた亮太に鋭い一瞥をくれ、
「…まだ何か？」
と言う。
「い、いや別に…」
亮太が自分の席に戻って程なく、後ろの方から
「ちょっと話があるんだけど」
「え！？　あ、い、いや…今は…」
「いいから！！　来なさい！！」
と言う坂本女史と安藤の会話と、その後耳を引っ張られて引きずられていく安藤の悲鳴が聞こえていた。
（…ご愁傷様…）
亮太は努めて振り返らないようにしながら心の中で安藤に半ば呆れながらも同情していた。
いつも顎で使われているのでちょっと悪戯がしたかったのだろう。だが、惜しむらくはすぐに安藤の筆跡だとバレてしまったことだ。
（…坂本さんも、眼鏡とあの性格止めればいい線行きそうだけどなぁ…）
そう思いながら亮太は心の中で溜め息をついた。視界の端では安藤がペコペコと坂本女史に謝っているのが見える。
そうしている間にも借り物競走は二年男子、女子、三年男子と進み、さつき達三年女子の番になった。
ピストルの合図と共に走り出したさつきは他を引き離して指示の紙のおいてある場所に着き、手近な紙を取る。
（…うーん、さつき先輩、やっぱりいいスタイルしてるなぁ…）
亮太がそんなところばかり見ていると、不意に紙を読んでいたさつきの動きが止まった。

さつきは暫く何かに迷っているかのように辺りをキョロキョロと見回していたが、やがて意を決したように亮太の方に向き直るとこちらに向かって走ってくる。
（げ…またかよ！？）
また坂本女史と関わりになるのかと亮太は身構える。
「亮太君、お願いがあるんだけど」
案の定、さつきは亮太の所にやってきて紙を見せた。
そこには、
『好きな異性を負ぶって（または負ぶってもらって）ゴールする』
と書かれている。
（…どうしてこう変な指示が多いんだ…）
半ば唖然としながらも亮太は渋々立ち上がった。

「ゴメンね、亮太君、重いでしょ」
亮太に負ぶさったさつきが済まなそうに言う。
「い、いえ…」
耳まで真っ赤になった亮太はともすれば背中の方に行ってしまいそうになる意識を必死で前に集中させ、ゴールを目指す。先程からさつきの身体の膨らみやぬくもりを背中越しに感じている上に、さつきが話しかけてくると耳に息がかかってしまうのだ。
この前抱きかかえたときにも感じたことだが、さつきは意外に華奢で、軽かった。これでバレーボールをやっても大丈夫なのだろうかと心配になるほどだ。
ドキドキいっている心臓の鼓動を少しでも落ち着かせようという亮太の涙ぐましい努力は今のところ成功しているとは言い難い。
「でも…どうして俺だったんですか？　さつきさんなら他にいくらでも相手は居そうなのに…」
少しでも気を紛らわそうと、亮太は適当に話題を見つけ、話しかけた。
「やだな、亮太君まであたしの事そんな目で見てたの？」

そう言いながらさつきは亮太の首に回している手をキュッと軽く締めて、また緩める。
「あたし、こう見えても奥手なんだけどなぁ…。それに、頼める人がちょうど他にいなかったのよ」
「はぁ」
何だか誤魔化すようなさつきの口調に、生返事を返しつつも亮太は先日垣間見たさつきの屈託のない笑顔をちらりと思い出してしまった。
そこへ、インタビュアーの女の子がマイクを手にやってきた。何か訊きたくてうずうずしているらしく、目がキラキラと輝いている。予想はしていたことだが、大勢の人目のあるところでさつきを負ぶっているということが改めて気恥ずかしくなってしまい、亮太は赤くなっていた顔をさらに赤くして俯いた。
「これは訊かないわけにはいかないでしょうね～。生徒会長の栗本さん、借り物は何ですか？」
さつきは無言で紙を渡す。
「『好きな異性を負ぶって（または負ぶってもらって）ゴールする』…おーっとこれは栗本さんに恋人発覚かーっ 」
インタビュアーがいかにも扇情的に声を張り上げると、女子からの黄色い歓声と、男子からのブーイングで生徒席がどっとわきかえった。
「残念でした、彼はただの後輩よ」
亮太に負ぶさったまま、悪戯っぽく微笑んでさつきが答える。亮太は早くこの時間が終わって欲しいと足早にゴールに向かって歩き続けている。
「栗本さんはそう言われておりますが…？」
さつきが一筋縄ではいかないことを知っているのか、インタビュアーは亮太にもマイクを向ける。
「…ち、違うよ」
やっとの事で亮太がそれだけ絞り出すのと、ゴールするのが大体

同じだった。

一方その頃、校庭の反対側の方ではある男が椅子の上に立ち上がって双眼鏡を覗き、地団駄を踏んでいた。

「くーっ！　武内の奴…あ、あんなにいやらしい顔をして栗本先輩を…」

わなわなと握り拳を震わせる、短い黒髪に黒縁眼鏡、そして濃く太い眉。

言わずと知れた康太郎だ。

最初のうちは黙って座っていた康太郎は、やがて借り物競走の三年女子の中にさつきの姿を見かけると突如として立ち上がり、用意していた双眼鏡を手に取った。そして、さつきが亮太の許へ行くと歯ぎしりを始め、あまつさえさつきが亮太に負ぶってもらうと辺り構わず文句を大声で言い始めたのだ。

もっとも、本人は単なる独り言のつもりだったのだが。

周りの女子達は気味悪がって近づかず、男子達でさえそっと椅子を離している者もいる。ただ、一年の頃からクラスが同じだったり、同じ剣道部だったりする者は慣れっこになっているのか気にしていないようだった。

「おのれ…許せん！　武内め…」

「…おい新庄、そうまでせんと見えんのか？」

亮太がゴールに着いたので双眼鏡をはずし椅子から降りた康太郎に、側でこわごわ見守っていた男子生徒が声をかける。

「いや、眼鏡をかければ両目とも１．５だ」

さらりと言ってのける康太郎に、その男子生徒は思わずコケそうになってしまう。

「だが、栗本先輩の美しいお姿を…」

こうなると康太郎はさつきについて延々と語り出すのだ。

その男子生徒は何気なく声をかけてしまった自分の軽率さを、死ぬほど後悔する羽目になった。

なおもしつこくインタビューを続けようとする女の子を振りきり、亮太はやっとの思いでクラスの場所まで帰って来た。午前の部はこれで終わりで、昼休みの時間だ。

「いやぁ、武内、最初はビビったけど、よく考えてみりゃあ栗本さんがおまえなんか相手にするわけないもんなぁ」

「どうだった～？　栗本先輩の感触？」

亮太の姿を見て、早速クラスの男子の何人かが声をかけてくる。

「ほっとけ」

思い出して多少赤くなりながらも亮太は素っ気なく答え、立ち上がって出て行こうとする。少々居心地が悪いのでもう少し、ほとぼりが冷めるまでどこかへ行っていようと思ったのだ。

「亮太、あ、真吾も待って」

そこへ、悪戯っぽく微笑んだ典子が美雪とやってくる。学校を抜け出して近くのコンビニへ弁当を買いに行こうとしていた真吾が立ち止まった。

「なに？」

「ふっふっふ…」

典子はニヤニヤ笑うばかりだ。

「何だよ、変な風に笑いやがって。気持ち悪いな」

パシッ

胡散臭そうな目つきでそう言った亮太を典子が叩き、続ける。

「実はあたし達、お弁当作ってきたんだ。真吾の分もね」

「俺の分？」

真吾がきょとんとして聞き返した。

「そ。真吾っていつも購買でパンばっかりでしょ。だから」

「…別に、気にしなくっていいんだぜ」

そう言いながらも真吾は嬉しそうだ。

「…で、あたし達って？」

叩かれた頭をさすりながらまだ胡散臭そうに亮太は訊ねた。

「典ちゃんと、あたし…典ちゃんみたいに上手には出来なかったんだけど…。口に合わなかったら、ごめんなさい」
その問いに、美雪が頬を桜色に染め、恥ずかしそうに答える。
「そ、そんな、綾瀬さんが作った物ならどんな物でも…あ、あれ？」
途端に態度を豹変させ、にこやかな笑顔で亮太が答える。だが途中でしゅんとなってしまった美雪に気付き、戸惑いの表情を浮かべた。
典子と真吾は呆れた様子で頭を横に振っている。
「…亮太、亮太」
「え？」
「それじゃ、誉めてることになんないわよ」
まだ分かっていない亮太に、典子が疲れた表情で言った。

「…何かピクニックでもしてるみたいに仲良く弁当食べてる奴らがいる」
本部席のテントに座って弁当を食べていた柳井が言う。
「何？」
さつきが聞き返した。柳井は指でトラックを隔てた向こう側、生徒席の方を指さす。
「ホントだ。あれ、美雪ちゃん達じゃない」
「…いいなぁ。俺はこんな所で寂しく弁当食べてるっていうのに」
わざと寂しそうにしながら、柳井が言う。
「ま。言ってくれるわね。私といるのがそんなに嫌なんだ？」
さつきがからかう。
「いや、まさか。とても幸せですとも。ええ」
「さっきと言ってることが違うわよ。大体…」
さつきが言いかけた時だった。
「あの、柳井先輩」
一年生らしい女の子が何人か、やってきた。そのうちの一人、今、

柳井に声をかけてきた子は、生徒会の役員だ。
「なに？」
柳井が振り向く。その女の子は恥ずかしそうに俯いてもじもじしている。
「ほら」
側に控えている取り巻きの女の子が、もじもじしている女の子を突っついて促す。
「…あ、あのっ、お弁当、作ってきたんです。よ、良かったら…」
そう言ってその女の子はかわいらしい小さな丸いお弁当箱を差し出す。
「ありがとう。かわいらしいお弁当箱だね」
柳井がそう言って受け取り、にっこり微笑むと、その女の子達ははしゃぎながら行ってしまう。
「…なかなか賑やかじゃない？　食べきれるの？　そんなに」
さつきは側に置いてあるいくつかの弁当箱を目で指し示す。それらは全てこういった経緯で柳井がもらった物だった。
「お弁当屋さんが開けそうですよ」
柳井が苦笑する。
「いいけどね、そんなことばっかりやってると、本命に逃げられちゃうんじゃない？　付き合ってるっていったって、乙女心は鎖で繋いでおけないのよ」
そう言って柳井をからかい、さつきは立ち上がった。
「…って、そりゃ一体…」
柳井が驚いた顔をして何かを言いかける。
「や、柳井君」
その時、また別の女の子が現れた。
「ちょっと、向こう行って来るね」
「え、ちょっ…」
さつきは柳井にウインクして、本部を出る。
後には珍しく途方に暮れた表情の柳井と、もじもじしている女の

子だけが残されていた。

のどかで、ゆったりとした時間が流れている。
ぽかぽかと心地よい日差し。時折頬をなでていくやわらかな風。
亮太達は仲良くお弁当を食べていた。
「良かった、武内君達に気に入ってもらえて」
美雪がほっとしたような顔をする。
おにぎりと太巻き、サンドイッチに唐揚げ、たこ型のウィンナー、野菜炒め、卵焼き、と、二人がかりで作っただけあって種類は豊富だ。レジャーシートの上に所狭しと並べられた品々を見て、真吾が呟く。
「…しっかしすごい量だな、食べきれんのか？」
「大丈夫よ、あれがいるもの」
微笑んでそう答えた典子は、すさまじい勢いでお弁当を平らげていく亮太を指さす。
「…納得」
呆れた様子でそう言いながらも、真吾も新しいおにぎりに手を伸ばす。これで三つ目だ。
幸せそうな表情で、典子は二人を見守っていた。これでこそ作ってきたかいがあったというものだ。
「ところで、綾瀬」
三つ目のおにぎりを食べ終わった後、真吾が訊ねる。
「何？」
「かねがね噂の、柳井とはどうなのさ」
「んぐっ！」
亮太はおにぎりを喉に詰まらせてしまう。あわてて胸をどんどんと叩く亮太に、典子がいつものように水筒を差し出す。
「…やだな、片桐君。そんな風に見える？」
美雪が恥ずかしそうに頬を染める。亮太は美雪がちらりとこっちを見たような気がした。

「うん。噂になってるし。興味あるね」
真吾がさらりと言う。亮太もいつの間にかぐぐっと身を乗り出していた。美雪は、何となく亮太の方が気になってしまい、ともすればそちらにばかり意識が集中してしまう。
「残念でした。ただの友達よ」
悪戯っぽく笑いながら、しかしハッキリと美雪は答えた。
「そ、そうなんだ」
何だかホッとしたような顔をして亮太が言う。
「あー、武内君まで…ひどーい」
美雪はぷくっと頬を膨らませ、拗ねて見せる。
「あ、い、いや…あの…」
途端に亮太はうろたえてしまう。それを見て、美雪はクスリと笑った。
「柳井君と仲がいいのは確か。でも、そういう特別な関係じゃないのも確かよ」
「そうなんだ…ゴ、ゴメン」
「いいのよ。…実は、昨日典ちゃんにも同じようなこと訊かれたの」
そう言うと、美雪は典子と顔を見合わせ、それから悪戯っぽく笑って続けた。
「でも、みんなから同じ事言われるなんて少しショックだな」
「みんな、お年頃って奴だからね。その辺には興味津々なのさ」
真吾がそう言って肩をすくめて見せた。それを見て、典子と亮太が呆れたような顔をしている。
「…おまえが言うか」
「そもそも、この話言い出したの真吾じゃない」
「…あれ、そうだっけ？　まーまー、細かいことは気にしない気にしない」
真吾は笑って誤魔化すと、再びおにぎりに手をつける。暫くその様子を呆れた表情で見ていた亮太だったが、すぐにそれに続いてお

にぎりを頬張った。
（…そうだったのか…）
にこにこしながら亮太はおにぎりを頬張る。ふと気がつくと、典子がじっとこっちを見つめていた。典子は亮太と視線が合うと、あわてて目を逸らした。
「何だよ」
また何か言われるのかと思い、亮太は胡散臭そうな目つきで典子を見る。
「な、何でもないわよ。よく食べるなーって」
「ほっとけ」
そう言いながらも、亮太は今度はサンドイッチに手をつける。何だかさらに食欲がわいてきているのだ。
「…おい亮太、食い過ぎて後になって苦しくって走れない、なんて言うなよ」
それを見て、呆れた表情の真吾が言った。

午後の部が始まると、亮太は椅子に座ってうとうとし始めていた。普段より早く起きたのとお腹いっぱいお弁当を食べたこと、それに柳井と美雪の関係が「ただの友達」だということが分かったので、何だかホッとしてしまったのだ。
「全く、いい身分だよ」
それに気がついた真吾が呆れたように言う。
「ホント。ま、らしいと言えばらしいけど」
典子がそう答えると、美雪も同意するかのようにクスリと笑った。
「起こしといた方がいいかな？」
亮太の頭を拳骨で殴る真似をしながら、典子が訊ねる。
「いいじゃない。もう暫く寝かせといてあげても。どうせ、クラス対抗リレーはまだなんだし」
「それもそうね。どうせ、起こしたってまたすぐ寝ちゃうだろうから」

そう言いながら典子は微笑んで亮太の幸せそうな寝顔を見つめる。
クシュン
とその時、寝ている亮太が小さくくしゃみをした。
「もう…亮太ってばあたしがいないと全然ダメなんだから…」
そう呟きながら典子は椅子の背もたれに辛うじて引っかかっていた亮太のジャージを取ると、そっと亮太にかける。亮太はそのまま幸せそうな、無防備な顔をして寝入っている。これこそが典子の見たかった亮太の顔だった。このまま、この寝顔が独り占めできたのなら…。
「…ちゃん…典ちゃん？」
そう美雪に呼ばれ、典子はハッとする。
「え？　な、何？」
「別になんでもないんだけど…。典ちゃん、何か心ここにあらずって顔してたから…」
気遣わしげな表情の美雪が典子を見つめている。
「…あ…り、亮太の寝顔、昔から変わらずしまりがないなぁって…」
咄嗟にそう誤魔化した典子は心の中で美雪に謝っていた。
（…ゴメン、美雪…あたしったら何て事を…）
「そ、そうなんだ…」
今度は美雪が心ここにあらずといった返事を返し、二人の間に気まずい沈黙が流れる。
「あ、あたし、もうそろそろ二人三脚に出なきゃならないから行くね」
ふと思い出したように美雪が言い、集合場所へと向かう。
「う、うん、頑張ってね」
そう言って美雪を送り出すと典子は再び亮太の方を見た。
亮太は相変わらず幸せそうな表情で眠っている。それは、今の典子にとっては禁じられた、手の届かない所へ行ってしまった幸せの証であるかのように思えてならない。

キュッと典子の胸が痛む。
（…ダメ…亮太は…ただの幼なじみ…）
無理に亮太の寝顔から視線を逸らし、遠ざかっていく美雪の後ろ姿を見送りながら、典子は心の中で何度も呪文のように繰り返していた。
そして、美雪もまた、心の中で典子に謝っていた。
典子が亮太の寝顔のことを話したとき、またしても亮太とずっと一緒だった典子に嫉妬してしまったのだ。
典子は料理のやり方を手ほどきしてくれたりしたのに。
亮太にあれほど美味しそうに食べてもらえる料理を教えてくれたのに。
（…ゴメンね、典ちゃん…あたし…友達の資格なんてない…）
そんな、親友にまで、いやだからこそ嫉妬してしまう自分が情けなかった。

「綾瀬さん、ちょうど良かった」　集合場所に着いた美雪を、坂本女史が立ち上がって呼び止めた。
「何？」
見ると、安藤が地面に座り込んで痛そうに顔をしかめている。膝の辺りをひどく擦りむいていて見ているだけで痛くなってきそうだ。安藤は、確か美雪と二人三脚でペアを組むはずだったのだが…。
「彼があれなのよ。で、急いで代わりを探してこないと」
そう言うが早いか、坂本は美雪の手を引いてクラスの場所へ向けて走り出す。坂本女史にしては珍しく冷静ではないようだった。
「誰か残ってた？」
走りながら女史が訊ねる。
「…ええと…武内君と…」
クラスの場所に残っていた人を思い出そうとしながら美雪が走っていると、急に女史の走りが遅くなる。どうやら息が切れらしい。
「だ、大丈夫？」

「…いい…から…早く……武内君なら…クラス対抗リレーしか…出てないから…大丈夫…」
よろよろとよろめきながら苦しそうに肩で息をしながら答える女史は、手振りで美雪に先に行くように指示をした。
「でも…」
「早ーく！！　…ハァハァ…」
女史のその声に追い立てられるように美雪はクラスの場所へと急ぐ。そこでは、相変わらず眠りこけている亮太と、キョトンとした顔の典子が出迎えた。
「どうしたの？　もうすぐ始まるんじゃないの？　二人三脚…」
「それなんだけど…。安藤君が怪我したみたいで代わりに誰か連れて行かないといけないみたいで…それで…」
「で、代わりに亮太ってわけね。分かったわ」
話しながら亮太を見つめる美雪の視線に気がついた典子が先を続け、席から立ち上がった。
「ちょっと、亮太、起きてよ…」
そう言いながら典子は亮太を揺り起こそうとする。
「…ん…。…もう食べられない…」
「…亮太ってば…」
「…むにゃむにゃ…」
「…亮太！！」
ついに痺れを切らしたのか、典子は側に置いてあった水筒を掴むとそれで亮太の頭を叩く。
ゴンッ
という鈍い音がして亮太は飛び起きて痛そうに頭を抱えてしゃがみ込んだ。
「…の…典子…おまえ…今日という今日は…」
「起きないのが悪いのよ。あのね、これから始まる二人三脚で、安藤君の代わりに美雪とペア組んで行って欲しいって」
「へ　」

まだ完全に目が覚めきっていないのか、亮太はキョトンとして典子と美雪の顔を交互に見比べている。
「あの、武内君…」
「何やってるの！！　早く！！」
美雪がもう一度説明しようとしたところへ、ようやくたどり着いた坂本女史が苦しげな金切り声をあげた。
「あ、あの…」
「早く行って！！」
その叫び声に弾かれたように、何か言いかけていた亮太は立ち上がって集合場所へ走り出す。戸惑いながらも美雪もそれに続いた。

「プログラム二十番…」
二人が集合場所へ着いたのとほぼ同時にアナウンスが流れ出し、係りの生徒の誘導でトラックまで移動が始まる。二人はどうにかその列に紛れ込んだ。
「あ、あの…俺…二人三脚なんて全然練習してないんだけど…」
移動中、亮太が隣にいる美雪に囁きかける。トラックに出ていくと周りの生徒席にいるたくさんの生徒達の姿が嫌でも見えてしまい、その数の多さに圧倒されて突然緊張してきてしまったのだ。
「大丈夫よ。イチ、ニ、イチ、ニで、右、左、右、左って足を出していけばいいんだから」
「右、左、右、左、だね。分かった。右、左、右、左…」
亮太は間違えないように何度も繰り返し呟く。
そうこうしている間にも列は二手に分かれ、本部席の正面とその反対の生徒席側で止まる。各選手はそれぞれ、各々のスタートした地点からちょうどトラックを半周して反対側にいる次の選手達にたすきを渡すことになっているのだ。
「よーい」
パーン
ピストルの合図で生徒席側のスタート地点から最初のペアが走り

出し、辺りに歓声が広がる。そしてそれと共に亮太の緊張も一層高まっていく。
「右、左、右、左…」
何とか気を紛らわそうと、亮太は必死に唱え続ける。
「武内君、そろそろ結んでおきましょう？」
ポンポン、と亮太の背中を叩き、美雪が言う。振り返ると、美雪が手にはちまきを少し長くしたような細長い赤い紐を持って立っていた。
「あ、う、うん…」
今気づいたのだが、二人三脚といえば当然足と足を結ぶわけで、つまりぴったり寄り添って、その上肩まで組んでいられるのだ。こんなにオイシイ事はない。
（綾瀬さんとぴったりと寄り添って…）
亮太の頭の中にもやもやと妄想が広がっていく。

ふれ合う身体と身体、肩に回した手に伝わる温もりと息づかい、そして、間近にせまったふっくらとした形のいい唇…。
上を向くようにして亮太の方を向いた美雪がそっと目を閉じる。何かを待っているかのように少し開かれたままの唇。そして…。

「…内君…武内君…？」
「は、はい！？」
亮太は急に現実に引き戻された。
「大丈夫？　どこか具合でも…」
「だ、大丈夫！　少し、緊張してただけ…」
怪訝そうに亮太の顔をのぞき込もうとする美雪から、亮太は慌てて顔を逸らした。耳まで真っ赤になっていたし、何だか顔を見られたら考えていたことがそのまま伝わってしまいそうな気がしたのだ。
「な、何？　綾瀬さん」
美雪があまり深く追求してこないうちに亮太は先を促した。

「あ、どっち側の足を結ぼうかと思って。武内君がそっち側でいい？」
ちょうど今美雪は亮太の左側に立っている。この状態だと亮太の左足と美雪の右足を結ぶことになるはずだ。
「う、うん、いいよ」
「じゃあ結んじゃうね」
亮太が深く考えずそう返事をすると、美雪は亮太の左側にぴったりと寄り、自分の右足を亮太の左足にそろえると、お互いの足を例の紐で結んだ。
「これでよし、と。じゃ、ちょっと練習してみる？」
かがみ込んでいた美雪が立ち上がった。
その仕草で腰まで届く長い髪が揺れ、ふうわりと甘い髪の香りが漂う。
ようやく少し落ち着きだしていた亮太の心臓の鼓動が再び早くなり始めた。
顔が熱くなってくる。
亮太はとうとう美雪の方から少し視線を逸らした。亮太と美雪の身長差は大体十センチぐらい、亮太の頬骨の辺りに美雪の頭が来るような感じだ。そのため、ちょっと顔を近づけると髪の香りがしてしまうし、また、美雪と向き合って話をしようとすれば自然と視線が少し下を向く形となって、体育着のTシャツの襟から覗く鎖骨のラインと、ちらちらと見え隠れする胸へと続くなだらかな曲線が目に入ってしまう。
「そ、そうだね」
見たいことは見たかったが、あまりに近くにありすぎて亮太には眩しすぎたのだ。
「じゃ…あ、あの…肩を…」
ちょっと恥ずかしそうにそう言いながら美雪が右腕を亮太の肩に回す。
「…えっと…失礼します…」

亮太も決まり悪そうにそう言いながら美雪の肩に手を回した。身体と身体がぴったりとくっつき、亮太は美雪の温もりと息づかいを間近で感じていた。

「あ、あの…練習…してみましょう…？」

「…う、うん」

まるで機械仕掛けのようにぎこちなく亮太は頷く。

「じゃ、いっせーの、せ、で、右から…」

「う、うん、右、左、右、左、だよね」

「うん。じゃ、いっせーの、せ…きゃあ！」

そう言って二人が最初の一歩を踏み出そうとした途端、二人は見事に転んでしまった。

亮太が右足を前に出し、そしてまた美雪も右足を前に出したためだ。つまり、亮太が呪文のように唱えていた『右、左、右、左』は、美雪の側から見ればその通りなのだが、亮太の側から見れば『左、右、左、右』にしなければならなかったのだ。

「だ、大丈夫！？　綾瀬さん！！」

そう言いながら慌てて亮太が立ち上がろうとすると、

「痛っ！」

美雪が小さく悲鳴を上げる。足を結んだままなのを忘れて立ち上がろうとした亮太が無理に足を引っ張ってしまったため、美雪の足をひねってしまったのだ。

「あ！！　だ、大丈夫！？」

「…う、うん、平気…。それより武内君こそ肘、擦りむいてる…」

痛そうに顔をしかめながらも、美雪は亮太の右腕を見て心配そうに言った。

「大丈夫だよ、これくらい。綾瀬さんこそ怪我なかった？」

「う、うん、あたしは平気。それより早く立ち上がらないと…」

美雪の言うとおりだ。もう亮太達の番まであまり時間がない。

二人はゆっくりと息を合わせて立ち上がると、足の具合を確かめた。

「大丈夫？　綾瀬さん」
「あたしは大丈夫。武内君は？」
「どうって事ないよ。じゃ、俺は左、右、左、右、だね」
亮太は擦りむいた肘についた土埃を払い、ちょっぴり微笑んでみせる。そうしないと美雪がいつまでも気にしそうだったからだ。
「ええ。ごめんなさい、あたしがちゃんと気がつけば良かったのに…」
「いいって。そろそろ行かないと。次だよね？」
「あ、そうね。じゃ…あたしは右足、武内君は左足から」
「うん」
「最初はゆっくりいきましょう。いっせーの、せ…」
今度はどうにか最初の一歩を踏み出す事に成功した。そしてそのままトラックに立ち、前のペアが到着するのを待つ。
そして、たすきが渡った。
「いっせーの、せ…」
受け取ったたすきを亮太がかけると、美雪が合図して歩き始める。だが亮太が少し焦ってしまったせいか、上手く歩調が合わない。
「あ、ご、ゴメン…」
そう言いながらもなかなか落ち着く事が出来ない。落ち着こう、落ち着こうと考えれば考えるほど、焦ってしまうのだ。
そんな亮太の手を、美雪がキュッと握って立ち止まる。亮太は驚いて美雪と顔を見合わせた。
「落ち着いて、武内君。深呼吸して。それからゆっくりでもいいから、一歩ずつ確実に行きましょう」
亮太の目をしっかりと見据えて、美雪が諭すように言った。
「…ありがとう」
そう呟くと、亮太は深呼吸を一つする。
「じゃ、ゆっくりね。いっせーの、せ…」
美雪の合図で再び二人は歩き始める。今度はちゃんと歩調が合い、次第に進むペースが速くなっていく。気がつけば立ち止まったにも

かかわらず二人はほとんど遅れた分を取り返して次のペアにたすきを渡すことが出来ていた。

「あの…足、大丈夫？」

ゴールに着き、たすきを渡し終わった後、二人の足を結んでいた紐をほどいている美雪に亮太がおずおずと訊ねる。亮太としてはこのまま結んだままでいたい位なのだが、先ほど転んだときに美雪は右足をひねってしまったらしい。だとすると足を縛った状態でいるのは負担がかかるだろうし、それに二人三脚で走っている途中でも少し右足をかばっているような感じがしたのでそれが気になっていたのだ。

「え？　…ええ、大丈夫。武内君こそ」

擦りむいた亮太の肘を心配そうに見ながら美雪はそう答えた。

「これくらい何でもないよ」

そう言って亮太も笑って見せる。美雪も微笑んでそれに応え、自分の右足を見つめる。

（大丈夫…）

美雪は立ち上がって感触を確かめるかのように右足首をそっと回してみる。まだ少し痛みはするが、そんなに問題はなさそうだ。

そう判断した美雪は内心ホッと胸をなで下ろしていた。

もし、これで保健室に行ったり、この後のクラス対抗リレーを欠席してしまえばきっと亮太が責任を感じるだろうからだ。多少痛むくらいなら家で手当てすればいいのだし、出る競技も後はクラス対抗リレー一つ。出来ることならこのまま誤魔化してしまいたい。

「…やった、二位だよ！」

不意に、亮太がそう叫んだ。たった今、アンカーのペアがゴールインしたのだ。

「ホントね。でもごめんなさい、急に安藤君の代わりやらせちゃって」

「…いやぁ」

亮太は曖昧に微笑んで答えた。ちょうど心の中で安藤にあんない思いをさせなくて良かったと思っていた所だったので、心の中を見透かされたのではとドキリとしたのだ。
「はい、退場でーす」
係の女子生徒がそう言いながら退場門の方へ誘導していく。
「あ、行こうか」
そう言って歩き出した亮太の動きに、美雪が一瞬遅れる。
「…綾瀬さん？」
「…ううん、何でも。ちょっと眠くなって来ちゃって」
怪訝そうな顔で振り返る亮太に美雪が悪戯っぽく微笑んで答え、恥ずかしげにコツンと頭を叩いた。
「朝早かったんでしょ？　…その…ありがとう」
ちょっと恥ずかしそうにそっぽを向いて亮太が言う。美雪は、心の奥から暖かいものがこみ上げてくるのを感じた。
「…どういたしまして。…典ちゃんのよりは美味しくなかったと思うけど…」
「そ、そんなことないよ！」
「そこ、とっとと退場してください」
立ち止まってもじもじしていた二人に、係の女子生徒が仏頂面で声をかけた。
「あ、やべ。行こう、綾瀬さん」
そう言って走り出す亮太に続いて美雪も走り出す。
（大丈夫…）
その心の中で、さっきの亮太の照れたような表情を思い出しながら、美雪はもう一度自分に言い聞かせるかのようにそう呟いていた。
亮太に責任を感じさせたくは、ない。

「美雪、足大丈夫？」
クラス席まで戻った二人を、早速典子が出迎えた。
「あ、うん、大丈夫。ありがと、典ちゃん」

美雪は微笑んで答え、そっと席に着く。
「全く亮太ったら…最初の一歩で間違えるんだもの。見ていてこっちが恥ずかしくなったわ」
それに安心したのか、典子が今度は亮太を責め始める。
「うるさいな」
仏頂面の亮太が答え、どさりと席に着いた。
「あ、それね、ちがうの。あたしが悪いの…」
慌てて美雪は自分の指示の間違いを説明する。
「ふーん。じゃしょうがないか」
からかう題材を失ってしまった典子がいささか拍子抜けしたように言った。
「いや、俺が気がつけば良かったんだよ。綾瀬さんが悪い訳じゃない」
照れる様子も何もなく、亮太がさらりとそう言って美雪をかばう。今までにない亮太の変化に、典子は急に亮太が遠くへ行ってしまったようなショックを覚える。
「ううん、そんなことないわ、あたしが…」
「よう亮太、どうだった？　綾瀬の感触？」
美雪が何かを言おうとしている間に、いつの間に戻ってきていたのか、ニヤニヤ笑いながら真吾が亮太の耳元で囁いた。
「…う、うるさいなぁ」
そう言いながらも思い出してしまい、顔が赤くなってしまう。
「おや？　顔が赤くなったぞ？」
「なってないって！！」
いきり立った亮太はへらへら笑いながら逃げる真吾を追いかけて行ってしまう。
「…何やってるんだか。ね、美雪、もういいじゃない、亮太はあの通りピンピンしてるんだし」
まだ落ち込んだ表情をしている美雪を典子が慰めた。
「…そうね。ゴメンね、典ちゃんにまで気を遣わせちゃって」

軽く溜め息をつくと、美雪は無理に微笑んでみせる。
「いいって。亮太は、そう簡単に怪我したりしないから」
遠くの方で真吾と追いかけっこをしている亮太を見ながら、典子は微笑んでそう答えた。小さく見える亮太の姿は、今の典子が感じている亮太との距離感そのものだった。

そしていよいよ、クラス対抗リレーの番がやってきた。
「クラス対抗リレーに出場する…」
マイクでアナウンスが入った。
四人は立ち上がって入場門の方へ向かう。
美雪は、他の三人に悟られないようそっと右足首を回してみて感触を確かめる。
先ほどから、少し痛みが増しているようで、少し心配だ。
（大丈夫、これだけ乗り切っちゃえば…）
そう自分を奮い立たせ、美雪は三人に遅れないように続く。
「いい、亮太、あたし達でなるべくリードするから、しっかり走りなさいよ」
「わ、わかってるよ」
リレーの順番は女子→男子→女子→男子となっていたので、典子、真吾、美雪の三人でなるべく他の選手に差をつけ、アンカーの亮太が出来るだけその差を守って走る、という先行逃げ切り型にしたのだ。
（…でもこれじゃあ、俺がどれだけ遅いかがよく判っちゃうよな…）
スタートを前にして、早くも亮太の心は沈んでいく。
「きゃっ！」
急に、一番後ろを歩いていた美雪が悲鳴を上げて転んだ。
「美雪！」
「綾瀬さん！」
「…あ、だ、大丈夫、全く、ドジでやんなっちゃう…たた…」

そう言いながら美雪は立ち上がろうとする。典子が手を貸した。
「ありがと、典ちゃん…あっ！」
小さな悲鳴を上げ、美雪がよろける。真吾がその身体を支えた。
「美雪、大丈夫？　保健室行った方がいいんじゃない？」
典子がその様子を見て言う。亮太も心配そうな顔をしていた。
「だ、大丈夫よ。今のはちょっと転んじゃっただけ」
美雪は痛そうにしていた方の足をトントン、と爪先を鳴らしてみせる。
「そう？　心配させてくれちゃって。全く」
ホッとした様子で典子が微笑んだ。亮太も、ホッとしたような表情になった。
「ごめんなさい」
「じゃ、早く行かなくっちゃ」
典子が促す。
（…大丈夫…）
美雪も一歩ずつ確かめるように歩き、それに続いた。

入場門の所で待機して、出番を待つ。
周りの者はみんなそれなりに速そうだ。亮太は今更ながらに緊張していた。
「大丈夫よ、武内君。武内君だって、練習して速くなったじゃない」
そんな亮太の様子に気がついたのか、美雪がそう言ってにっこりと微笑む。
「う、うん」
こうして励まされるなんて、何だか情けないなと亮太は思う。それでも美雪の笑顔は何よりも亮太を励ましてくれるのだ。
「あきらめちゃったら負けよ。出来るんだって思わなくっちゃ」
「そ、そだね。あ、ありがと」
亮太が次に何かを言おうとした時。

「武内、さっきはよくも…」
後ろから聞き覚えのある甲高い声が聞こえた。
声の主は、もちろん康太郎だ。亮太が振り返ると、康太郎は竹刀を手に、怒りに身体をわなわなと震わせている。
「…ど、どもー」
なぜ康太郎がそこまで怒っているのか亮太に心当たりはなかったが、手にした竹刀と、康太郎の目に宿る怒りの炎に圧倒され、亮太はひきつった笑みを返す。
「き、貴様…栗本先輩になんたる破廉恥な真似を…」
低い声でそう呟きながら康太郎は亮太の襟首を掴む。亮太にもやっと康太郎が何をそんなに怒っているのか理解できた。しかしそれは筋違いというものだ。
「ち、ちょっと…別に俺が…」
「問答無用！！」
「こら！　そこ！　何やってるの　」
康太郎が亮太の上に竹刀を振り降ろそうとしたとき、後ろからさつきの声が響いた。
「く、くくく栗本先輩っ　」
途端に康太郎が振り返り、気を付けの姿勢をとって竹刀を後ろ手に隠す。
「危ないじゃない。だめよ、こんな物振り回しちゃ」
さつきが言い、手を差し出すと康太郎は決まり悪そうにしながら竹刀を差し出す。
「体育祭が終わるまで預かっとくわね」
「は、はいっ！！　申し訳ありませんでした！」
直立不動の姿勢のまま大声でそう叫ぶ康太郎から亮太の方に顔を向けると、さつきは悪戯っぽく微笑んで言う。
「じゃ、亮太君、しっかりね」
「は、はあ」
答える間も亮太はさつきと一緒に来ていた柳井が美雪の方へ行く

のが気になって仕方がない。柳井は美雪に何か話しかけている。
「足、大丈夫か？」
美雪の右足首を指さしながら柳井が訊ねた。
「うん、大丈夫。…でも、みんなに見られてたのね、恥ずかしいな」
精一杯微笑んで美雪がそう答える。柳井の前ではちょっとした素振りでも感づかれてしまいかねない。美雪は内心緊張していた。
「ま、頑張ってな。俺が、海よりもふかーい愛情で応援してやるからさ」
上手く誤魔化せたのか、柳井は悪戯っぽく微笑んでそう言い、頭をポンポン、と叩く。
「…ご遠慮いたします。柳井君、深すぎて底が見えないんだもの」
「つれないなぁ」
ホッとした美雪がつんとすましてそう答えると、柳井が苦笑した。
「プログラム…」
マイクで、入場のアナウンスが入った。
いよいよだ。
「じゃ」
片手をあげて挨拶して列に戻ろうとした美雪は、足の痛みで一瞬よろけてしまう。
「おっと」
とっさに、柳井が支えた。
「…あ、ありがと」
「…どうした？　足、やっぱり…？」
険しい顔になって、柳井は問いただすように美雪の顔を見つめる。滅多にないことではあるが、美雪は柳井がこういう表情で問いただす時は心の底まで見透かされてしまうような気がして、嘘がつけなくなってしまうのだ。
「う、ううん、平気。大したことないから…」
そう呟いて無理矢理柳井の手をふりほどくと、美雪は急いで列に

戻った。
「…あいつ…」
その背中を見送りながら、柳井が寂しげな表情でぽつりと呟いた。

パーン
第一走者が走り出し、クラス対抗リレーが始まった。
亮太達の第一走者は典子だ。快調にスタートした典子は最初から他の走者にぐんぐんと差を付け、先頭を走っていく。ギャラリーのあちこちから、感嘆の溜め息のようなものが漏れ聞こえてくる。
その次は真吾だった。
真吾はどうしてか知らないが、部活をやっているわけでもないのに運動が出来る。今も、典子が付けたリードをぐんぐん広げていくのだ。亮太は世の中の不平等を思わずにはいられなかった。おまけに、真吾の走る様子を見ている女子が、立ち上がって声援を送っている。それも、同学年だけにとどまらず三年生も一年生も、なのだ。
（ちぇっ、あいつ、一体どこまで手広くやってるんだ？）
亮太は今更ながらに呆れてしまう。
真吾が近づいてくるのを見ながら、亮太は少し深呼吸してから口を開く。
「綾瀬さん、頑張ってね」
照れくさいのでそっぽを向いたまま、次に走ることになっている美雪にそう声をかけた。
だが、返事がない。
不思議に思った亮太が振り返ると、美雪は右足首を押さえてうずくまっていた。
「綾瀬さん？」
亮太はもう一度声をかける。
まさか…。
嫌な予感が、亮太の脳裏をかすめる。
「…あ、な、何でも…あっ！」

亮太が見つめているのに気づいた美雪が、慌てて立ち上がろうとしてよろけた。
「綾瀬さん、もしかして…」
「だ、大丈夫。平気だから」
そう言いながら、支えようとした亮太の手を振りきり、美雪はスタート・ラインに立つ。
（…お願い…何とかもって…）
美雪は、だんだんと痛みがひどくなりはじめている足に、そう祈った。トラックの方に目を向けると、すごい勢いで真吾がやってくるのが見える。
一つ深呼吸すると、少しずつリードしながらバトンを待つ。この時点では、既に真吾は他の選手に半周の差を付けていた。
パシッ
バトンが、美雪の手に渡った。
美雪は引き絞った弓から放たれた矢のように、走り始める。
ズキッ！
右足が激しく痛み出す。
だがそれにも構わずに美雪は走り続けた。足を下ろす度、心臓の鼓動のようにズキズキと右足が痛む。
（…もう少し…お願い…）
懸命に、美雪は走る。だが、次第にその速度は遅くなっていく。そして、それに反比例するかのように足の痛みが増していった。
美雪の走りがどんどんぎこちないものになっていく事に気付き、会場全体がざわめき始める。
「あいつ…」
舌打ちして柳井がトラックの方へ飛び出していく。
「ち、ちょっと！？　柳井君！？」
さつきもそれに続いた。
「綾瀬さん！」
亮太は自分の待機していた場所から飛び出し、美雪の許へ駆け寄

ろうとする。
その亮太の肩を、真吾が掴んだ。
「どこ行くんだよ」
いつものへらへらした様子はかけらほどにも感じさせない、落ち着いた、低い声で真吾が訊ねる。
「止めさせなきゃ！　あんなに苦しそうじゃないか！」
美雪は、片足を引きずるようにして走っている。いや、もう走っているとは言えなかった。せいぜい、早足、ぐらいだ。亮太はいたたまれなくなっていた。
「お前が行ってどうなる？　バトンを受けるのはお前、だろ」
最終コーナーの所にさしかかっている美雪を、後ろから二番手がぐんぐん追い上げて来ている。
「でももう見てらんないよ！　あんなの！」
叫んで飛び出そうとする亮太の肩を、がっちりと真吾が掴んだ。
「放せよ　」
真吾の手をふりほどこうともがきながら亮太は叫ぶ。
「ふざけるな！！」
そう叫んだ真吾は亮太の両肩をがっちりと掴んで引き寄せ、自分の方を振り向かせると、真剣な眼差しで亮太の目をしっかりと見据えて言った。
「じゃあ何のために綾瀬はああして走ってるんだよ！　お前にバトンを渡すためだろ！　綾瀬のこと思うなら、しっかりバトン受け取って、全力で走ってこいよ　」
「…」
亮太は無言のまま美雪を見つめた。美雪はよたよたと足を引きずりながらもなお一歩ずつ、泣きながら前へ、亮太の待つはずのスタート・ラインへ、進んでいこうとする。
「美雪、しっかり！」
「後十メートルだ！」
典子と柳井が声援を送っている。さつきもその側で見守っていた。

立場上、特定の生徒を応援するわけにはいかなかったのだ。
（…頑張って、美雪ちゃん…）
だが、心の中ではもちろん美雪に声援を送っていた。
のろのろと真吾の方に向き直った亮太の目に、ある光を見て取った真吾は肩を掴んでいた手を離し、
「しっかりな」
今度はポン、と、その肩を叩いた。
それに答えるかのように小さく片手を上げると、亮太は無言でスタート・ラインへ向かう。
後八メートル。
…七…六…五…
美雪が大きくよろけた。
「後少しだ！」
亮太は我知らず叫んでいた。もう、緊張も、何もなかった。ただ、目の前の美雪の思いに、答えたかった。
…四…三…二…
二位との差はほとんどなくなっている。
…一…
そして、バトンが渡った。ほとんど同時に、二着の選手のバトンも渡る。
弾かれたように、亮太は走り出した。

バトンを渡した美雪がそのまま倒れ込みそうになるのを、柳井が支えた。
「…くっ…うっ…」
美雪は、泣いていた。
「バーカ。無理しやがって。ほら」
そう言って柳井は腰をかがめる。
「…え…な、何…？」
美雪は、泣きながらくぐもった声を出す。

「負ぶさるの。それとも、腕に抱かれた方がいい？」
柳井がへらへらと笑う。
「ば、ばかっ！　それぐらい一人で歩け…きゃっ！」
途中で美雪が悲鳴を上げる。柳井が、急に美雪の身体を負ぶったためだ。
「保健室、直行な」
真面目な顔になって、柳井が言う。
「ま、待って、柳井君」
美雪が懇願するような調子で、言った。
「わかってるよ。これが終わったら、な」
柳井は美雪が見やすいように、亮太が走っている方を向き、呟く。
「…全く、馬鹿なんだからな…」
それは美雪について言っているというより、むしろ自分自身に対して言っているように、美雪には聞こえたのだった。

（くそ！　走れ！　走れ！）
トラックで、亮太ともう一人との、激しいトップ争いが続いている。今のところ亮太がわずかにリードを保っている。亮太は自分がここまで走れるとは思ってもみなかった。
「武内君、しっかり！」
「武内、がんばれ！」
クラスの前を通った時、誰かが応援している声が聞こえた。
「亮太、後少し！」
典子の声が聞こえる。
「亮太君！　しっかり！」
さつきも、我を忘れて応援していた。
最終コーナーを抜け、ラストの直線へ。そこで相手が一気に勝負に出た。
（負けるかよっ！）

亮太も渾身の力を込めて、走る。
後、四メートル。
三。
二。
相手が、わずかにリードした。亮太も最後の力を振り絞り、前へ出る。
一。
パーン
アンカーのゴールを合図するピストルが鳴った。
ハァハァ…
荒い息で倒れ込みそうになる亮太を、真吾が支えた。
「お疲れ」
「お疲れさま」
典子と美雪を負ぶった柳井が、そしてちょっと遅れてさつきが、亮太の周りに集まってくる。
「…ど…どっちが…？」
絞り出すような声で亮太が尋ねる。
「ただいまの結果を発表します…」
その問いかけに答えるかのように結果発表のアナウンスが流れる。
「一位…G組、二位…C組、三位…」
「お疲れさん」
亮太の肩をポンと叩いて、真吾が言う。
だが、不思議と悔しくはなかった。ただ、全力を出しきったという心地よい充実感があるだけだ。
「…ふぅ…」
一つ大きく息をした亮太は、美雪の側まで行く。
「…ご…ごめん、負けちゃった…」
「あたしこそ…ごめんなさい、あの時、転ばなければ…」
美雪が泣きそうな顔で答えた。
「…そ、そんなことないよ。綾瀬さんは…一生懸命やったんじゃ

ないか！　俺が…」
「亮太、今は綾瀬の手当が先だろ」
そう言いかけた亮太の肩をポンと叩き、真吾が言う。
「さて、行くか」
亮太が『しまった』と言う表情で黙ったのを見て頷くと、柳井が歩き出す。さつきも一緒にトラックを出ていこうとするが、途中で振り返った。そして暫くの間言葉を探すようにどこか遠くを見つめていたが、やがて微かに首を振ると
「…格好良かったよ、亮太君」
そう言うと、何かを考えるような表情のまま戻っていった。
亮太は遠ざかっていく柳井と美雪の後ろ姿を見送りながら、いつか、柳井の代わりに自分が美雪の側にいるようになってやる、と思う。
もう、やる前から諦めたりしない。
今、初めてスタート・ラインに立てたような気が、亮太にはしていた。

体育祭終了後、制服姿に着替えた亮太と典子は亮太の住むマンションまで戻った。ちなみに、美雪は保健の高倉先生の車で病院へ行っている。
「あーあ、亮太があそこまでやるなんて思わなかったわ」
部屋のドアの前でごそごそと鍵を探す亮太に典子が言い、大きくのびをした。さすがに、少し眠い。
「ほっとけ」
そう言いながら最初は右ポケット、次は左、それから学ランのポケット、ついには鞄の中までごそごそ引っかき回す亮太に気づいた典子が呆れた表情で言う。
「…まさか、鍵失くしたとか？」
「…」
黙って探し続ける亮太の様子が、その答えだった。

「…もう…しょうがないんだから…」
そう言いながら典子は自分の鞄から合鍵を取り出して亮太に渡す。
それには、まるまると太った、まん丸の目をしてすっとぼけた顔をした黒猫のキーホルダーがついている。
亮太がかつて鍵と一緒に渡したものだ。
「まだこれ付けてんのか」
ドアの鍵を開けた後、しげしげとそのキーホルダーを眺めながら懐かしそうに亮太が呟く。
「いいじゃない、別に。あれこれ言うなら貸してあげないわよ」
ふくれ面でそう言いながら典子が鍵を取り上げた。
「…別に。それより腹減ったー。お弁当残ってない？」
そう言いながら亮太は靴を脱ぎ散らかし、奥へと上がっていく。
「あるわけないでしょ。誰が一番食べたと思ってるのよ。それにね、靴ぐらいちゃんと揃えなさいよね！」
手に持っていた鍵を靴箱の上に置き、ふくれ面で亮太の靴を揃えた典子は奥へと上がっていく。
だが、ふくれ面をしてはいながらも、いつも通りの亮太であることに安心せずにはいられなかった。
遠くに行ってしまったと思った亮太が、また近くに戻ってきたような気がしたのだ。
「…あ」
ふと気がついて振り返り、靴箱の上においたままだった鍵を取る。
そして黒猫のキーホルダーを指で軽くつついた。
「忘れてごめんね、リョウタ」
そう呟くと、典子はその合鍵をそっと鞄にしまった。
「ちょっと亮太、聞いてるの！？　靴ぐらいちゃんと揃えなさいって言ってるのよ！！」
「わーってるって…」
亮太はベットに寝転がって答える。今になってどっと疲れが出てきて、ちょっと気を抜いたら寝てしまいそうだ。

だが、不思議と気力だけは充実していた。これから、どんな風に美雪に声をかけようかなどとぼんやりと考えてみる。
『別に、遊園地とかじゃなくてもいいんだぜ。はじめは図書館で試験勉強とかな。それだったら、別にデートって感じがしないだろ』
ふと、前に真吾の言った台詞が脳裏をよぎった。
（…試験勉強、か…）
それがいいかも知れない、と思いながら、亮太の意識は次第に遠くなっていった。
「ちっとも分かってないじゃない！　大体ねぇ…」
途中まで言いかけて、典子はふっと口をつぐんだ。
亮太がベットに寝転がってすやすやと安らかな寝息を立て始めていたのだ。
「…もう、亮太ってばあたしがいないと全然ダメなんだから…」
微笑んでそう呟きながら、典子はクローゼットから布団を取り出して亮太の上にそっとかける。
「お休み、亮太…」
そっとそう呟き、暫く亮太の寝顔を見つめていた典子だったが、いつの間にかベットに突っ伏すようにして眠ってしまっていた。
「…亮太…」
幸せそうな表情でそう呟く典子。一体、彼女の見ている夢はどんな夢なのだろうか…。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9716e/

セピア5 スタート・ライン

2010年10月17日03時31分発行